

IPCCの地球温暖化に関する統合報告書発表

主として朝日新聞2014年11月3日夕刊から

国連の気候変動に関する政府間パネル(IPCC)は、世界中で発表されている論文について調査を行い確からしいものを選んで、1990年以来6年おきに統合報告書として公表して来た。

その内容は①自然科学的根拠②影響・適合策③削減策の3作業部会の報告書をもとに作成している。

今回は、2日に公表されたが、温暖化ガスの排出をこのまま続けると、その影響が深刻化するがそれを避けるため、気温上昇を19世紀の工業化前と比べて2度C未満に抑制する目標について「道筋はある」と明記した。

具体的には、2050年に世界全体の排出量を2010年比で半減し、今世紀末にゼロにする道筋を描いた。

主な削減技術としては、①バイオ燃料、②CCS(二酸化炭素を回収し地中に封じ込める)、③原子力、④風力・太陽光利用 を挙げた。

国連で進められている温暖化交渉は年末から本格化するが対策に早急に乗出すか否か、国際社会に決断を迫る内容となった。

【観測された変化】温暖化は疑う余地がない。1880年から2012年までに世界の平均気温は0.85度暖かくなっている。

【温暖化の原因】人間によるこれまでの排出で、二酸化炭素、メタン、一酸化二窒素の大気中濃度は、少なくとも過去80万年で前例のない高い水準に達している。人間の影響は20世紀半ば以降に観測された温暖化の主な原因であった可能性が極めて高い。

【極端現象】1950年ころから極端な低温の減少、極端な高温の増加、極端な海面水位の上昇を含む極端な気象や気候の変化を観測。いくつかは人間の影響と関連している。

【予測される変化】評価したすべての排出シナリオで、今世紀中は気温が上昇すると予測されている。今世紀末の気温上昇は0.3～4.8度になる可能性が高い。今世紀末に海面水位が26～82センチ上昇する可能性あり。

【長期的な変化】人間による温室効果ガスの排出を止めても、関連する影響は何世紀にもわたって続くだろう。温暖化の規模が大きくなれば、急激で不可逆的な変化が起こるリスクは大きくなる。

【リスクの軽減】現行を上回る追加的な削減策が取られなければ今世紀末までの温暖化は、深刻で広範にわたる不可逆的な世界規模の影響をもたらすリスクが「高い」レベルから「非常に高い」レベルに達するだろう。

【適応策の特徴】適応策はリスクを減らすことができるが、温暖化の程度がより大きく、速度がより速い場合には有効性に限界がある。

【削減策の特徴】気温の上昇を2度未満に抑制する可能性の高い削減の道筋は複数ある。このシナリオでは2050年までに温室効果ガス排出を2010年比で、40～70%減らし、今世紀末には排出をゼロかそれ以下にすることが必要だ。

【削減策】すべての主要分野で、削減策は存在する。費用対効果の高い削減策は、エネルギーの消費削減や効率改善、エネルギー供給の脱炭素化、森林などの吸収源の強化などを組み合わせた統合的な取り組みによる

朝日新聞2014年11月12日夕刊から、APEC会議関連

米中首脳会談後の共同声明で、温室ガス減で米中が新目標を発表した。
「世界の1/3以上の温室効果ガスを排出する米中が気候変動の問題に決定的な役割を果たさなければならない。」

	2020年の目標	2020年以降の目標
米国	05年比で17%程度減	25年までに05年比 26~28%減
中国	GDP 当りCO ₂ 排出量を05年比 で40~45%減	30年頃までにCO ₂ 排出量 がピークを迎えるようにし、 化石燃料以外の割合を約 20%に増やす。
日本	05年比で3.8%減らす(暫定目 標)	検討中
欧州連合	1990年比で20または30%減	30年度までに90年比で 40%減